

二〇二六年度

日本近代文学会

秋季大会

徳島文理大学文学部日本文学科共催



10.10.11

[SAT]

[SUN]

徳島文理大学高松駅キャンパスにて

《特集》

装置としての

《土地の言葉》に着目し

そのメカニズムを

浮き彫りにする

《土地の言葉》

で／を

書くことの戦略

来場自由・参加費無料

11
[SUN]

●午前10時30分より

《研究発表》

〔第二会場〕宮澤桃子 朴恩斌

〔第三会場〕三林優樹 花澤哲文

《懇親会》

〔第一会場〕小峰隆広 駒木結 西山恵 日比嘉高

〔第二会場〕張東悦 北崎花那子 大胡芽生 木下弦

〔第三会場〕吉田司雄・高橋修・紅野謙介

10
[SAT]

●午後1時より

《研究発表》

〔第一会場〕小峰隆広 駒木結 西山恵 日比嘉高

〔第二会場〕張東悦 北崎花那子 大胡芽生 木下弦

〔第三会場〕吉田司雄・高橋修・紅野謙介

基調講演

●午後1時より

ムラサキキネンホール

朝日祥之

郷里を離れ、郷土を作り出す

——移動する人びとの言語生活から

発表

渡邊英理

汀の言葉——崎山多美『グジャ幻視行』『マピローマの月に立つ影は』にみる（再）開発とジェンダー

柳井貴士

地霊の聲が交わる境域としての沖縄——又吉栄喜作品を中心に

総合討論

最新の情報は
ウェブサイト
<https://amjls.jp/>
でご確認ください



特集の趣旨

日本近現代文学には、さまざまな地域の〈土地の言葉〉が用いられてきた。ここで言う〈土地の言葉〉とは、単に特定の地域内で話される方言だけを指さない。なぜならそこでは必ずしもその地域に根差した方言だけが話されてはいないからだ。

近代化に伴う人びとの移動の活発化は、各地で諸方言の話者同士を出会わせた。一方で官民の「国語」への欲望を背景として標準語が形成され、異なる方言話者同士の意思疎通に益することになり、標準語や各地の方言が並存するようになった。そしてこの状況は、日本の領土が変更される過程でさらに進行し、複雑化した。例えば植民地への集団移住は方言話者の移動の規模を大きくし、また植民地出身者に対する言語政策は日本語と他言語の接触を生じさせた。こうした動きと平行して、内地・外地を問わず、都市部を中心に社会的階層や民族的出自等を背景にした集団が発生し、その内部では集団の性質を色濃く反映した言葉が使われるようになった。

このように近代化により活発となった人びとの移動は、中央・地方、内地・外地にかかわらず、地域の境界を越えて標準語を含むさまざまな言葉の共存や混用を生じさせた。しかし、このことは複数の言葉が社会的に等しい地位を与えられていたことを意味しない。標準語政策や国語政策のあり方にあらわれているように、標準語・方言、国語・非国語といった階層構造は確固として存在し、またその構造は、それぞれの言葉を用いる集団間の権力関係とも結びついていて、それゆえ、人びとは自らの話す言葉の社会的位置づけを意識せざるを得ず、帰属する集団の変更や複数化に伴い、集団への適応のために新たな言葉の獲得や使い分けを必要とした。

では日本近現代文学は、人びとの動的な生に密着した非単一的な〈土地の言葉〉とどのように向き合ってきたか。また、いかなる表記的・表音的な工夫や戦略がとられることで非単一的な〈土地の言葉〉が浮かび上がるか。文学を通して〈土地の言葉〉に触れるとき、読者の〈土地の言葉〉の理解度に関する区分線が顕在化されつつも、〈土地の言葉〉に適応しながら読み進める過程で徐々に区分線が揺らぐ。そうした文学が映画化・演劇化され、〈土地の言葉〉が音声によって表象されるとき、文字表現との間にどのような差異が見出されるのか。さらには、〈土地の言葉〉の使用によって特定の地域の固有性を喚起すること、消費することの両義性も問いたい。したがって、本特集では、地域や集団内外の言語的階層性、流動性、錯綜性等を可視化する装置としての〈土地の言葉〉に着目し、そのメカニズムを浮き彫りにする。

(運営委員会)

プログラム

〔会場：徳島文理大学高松駅キャンパス〕



〔開場〕
12時30分
〔開始〕
13時00分

- 《開会の辞》古田昇〔第三会場〕3階東棟 E0304 から各会場に中継予定〕
- 〔第一会場〕3階東棟 E0306
- 《研究発表》
- 小峰隆広 〈私塾〉の夕暮れ——錯綜する教育空間としての『三義当世書生気質』
- 駒木結 谷崎潤一郎「幫間」における価値の転換——相場師から幫間へ
- 西山恵 森鷗外「雁」論——語り手「僕」の欲望——
- 日比嘉高 時評の地形図——『文藝時評大系』コーパスによる戦前期文学史の再検討
- 〔第二会場〕3階東棟 E0305
- 《研究発表》
- 張東悦 芥川龍之介「アグニの神」における隠喩の論理——身体表象にみる植民地的権力関係の倒錯
- 北崎花那子 〈不良少女〉は探偵する——久山秀子「隼お秀」シリーズとジェンダー
- 大胡芽生 文字の声の残響——戦前日本のヘレン・ケラー受容と中島敦「文字禍」
- 木下弦 元軍人の子という主題——安岡章太郎・色川武大・阿部昭——
- 〔第三会場〕3階東棟 E0304
- 《パネル発表》
- 吉田司雄・高橋修・紅野謙介 近代文学における偶然と必然
- 〔ギャラリーカフェ シレーヌ〕
- 《懇親会》（午後五時三〇分より）



〔開場〕
10時
〔開始〕
10時30分
〔特集開始〕
13時00分

- 〔第二会場〕3階東棟 E0306
- 《研究発表》
- 宮澤桃子 倉橋由美子「死んだ眼」論——革命を降りる〈少女〉——
- 朴恩斌 小林エリカ『トリニティ、トリニティ、トリニティ』論——「わたしたち」が放つ不穏な音
- 〔第三会場〕3階東棟 E0305
- 《研究発表》
- 三林優樹 ふつうの人々の中絶——曾野綾子『神の汚れた手』のポストリブ
- 花澤哲文 小説「苦役列車」と映画『苦役列車』の往還的表象——現実における「西村賢太劇場」の行動と戦略について——
- 〔特集会場〕ムラサキキネンホール
- 《特集》〈土地の言葉〉で／を書くことの戦略
- 基調講演
- 朝日祥之 郷里を離れ、郷土を作り出す——移動する人びとの言語生活から
- 発表
- 渡邊英理 汀の言葉——崎山多美『クジャ幻視行』「マピローマの月に立つ影は」にみる（再）開発とジェンダー
- 柳井貴